

教科「情報」に対する高等学校卒業生の意識調査

著者	中園 長新
著者別名	ナカゾノ ナガヨシ
内容記述	日本教育工学会 第25回全国大会 2009年9月19日(土)～21日(月) 会場：東京大学(本郷キャンパス)
雑誌名	日本教育工学会大会講演論文集
巻	第25回
ページ	681-682
発行年	2009-09-20
その他のタイトル	Survey of High School Graduates Attitude to Subject "Information Studies"
URL	http://hdl.handle.net/2241/103704

教科「情報」に対する高等学校卒業生の意識調査

Survey of High School Graduates Attitude to Subject “Information Studies”

中園 長新

Nagayoshi NAKAZONO

筑波大学大学院 教育研究科

Master's Program in Education, University of Tsukuba

〈あらまし〉 情報教育や教科「情報」について、当事者である高等学校の生徒がどのような認識を持っているのかについて、高等学校卒業生に対する質問紙調査で明らかにすることを試みた。その第一次調査に基づき、「情報」という語に対するイメージと教科「情報」に対するイメージを収集し、それらの傾向が大きく異なる点に注目した。教科「情報」はコンピュータの使い方を学ぶという側面が前面に押し出された形になっており、高等学校卒業生の多くは教科「情報」で「情報」について学んだのではないと感じている。今後はこの乖離の原因を特定し、教科「情報」が情報教育の場として有効活用されるための取組について検討していく必要がある。

〈キーワード〉 情報教育、高等学校教育、情報リテラシー、意識調査、教科「情報」

1. はじめに

これからの情報社会を生きる子どもたちにとって、情報教育は必要不可欠である。文部科学省は「情報活用能力」の育成をめざすため、1999（平成 11）年 3 月告示の現行学習指導要領において高等学校教科「情報」を履修教科として新設した。2009（平成 21）年 3 月告示の新学習指導要領でも、科目が再編され継続していくことが示されたのは記憶に新しい（文部科学省 2009）。その一方で教科「情報」に対する世間の目は厳しい。いわゆる「未履修問題」では一部高校で教科「情報」を履修させていないことが問題になり、教科「情報」が「高校生にとって必要な教科」であると認識されていない風潮がうかがえる。

こうした情勢の中、情報教育や教育の情報化の現状や展望などについて多くの議論がなされている。たとえば、コンピュータ教育開発センター（2009）は教科「情報」担当教員を対象に調査を実施して結果をまとめているし、回答者の違いを分析した研究も見られる（清水ほか 2007）。一方、当事者である高等学校の生徒が情報教育や教科「情報」に対してどのような認識を持っているのかについての調査は、ほとんど行われていないように見受けられる。

本研究では、高等学校卒業生に対して質問紙調査を実施し、情報教育を受けた卒業生が情報教育についてどのような認識を持っているのか明らか

かにすることを試みた。本稿ではその第一次調査に基づき、主として教科「情報」に対するイメージの分析について報告する。

2. 調査の概要

本研究では高校での情報教育と生徒の関わりを調査するが、高校在籍中の生徒を調査対象とした場合、たとえば教科「情報」の履修年次の違いなど様々な差異が想定され、均一な調査が実施できないと考えられる。そのため今回は高等学校で教科「情報」を履修した経験を持つ大学生（高等学校卒業生）を対象とし、高校時代の情報教育が当時の生徒にどのように受け止められているのかを把握するために質問紙調査を実施した。

フェイスシート以外の主な質問内容は、高校時代に履修した教科「情報」の科目や実施状況、「情報」という語をどのように捉えているか、高校時代の教科「情報」についてどのような印象を持っているか、などである。調査は大学生を対象として 2009 年 5 月に実施し、81 名の回答（うち有効回答数 77）を得た。

3. 調査の結果

本稿では調査回答のうち、「情報」という語を自分自身の言葉で定義した結果（「情報」という語に対するイメージ。以下設問 1）と、教科「情報」に対するイメージ（以下設問 2）について報告する。これらの回答はそれぞれ自由記述形式により得た。複数の回答を併記した回答者もいたた

め、それらを別々に数え上げると有効回答数は設問1が84(一人あたり平均回答数1.09)、設問2が154(一人あたり平均回答数2.00)であった。

各設問の回答を、類似したものをグループ化してまとめ上げた結果、それぞれ表1と表2に示すような結果となった。各項目末尾に付記した括弧内の数字はその分類に該当する回答件数を示す。また、表2において、右列の項目は左列の項目の部分集合である。

表1:「情報」という語を自身の言葉で定義した結果

様々なものごとを伝えること、あるいは伝えること (17)
ものごとを知ること、あるいはその知識 (17)
生活において必要不可欠なもの (11)
生活において便利なもの (7)
信憑性などの点において取扱いに注意を要するもの (7)
我々の行動に影響を与えるもの (7)
認知・処理されるもの (6)
コンピュータを道具として用いるもの (5)
時代などにかかわらず変化しないもの (2)
その他、「情報」の本質や実体を考察した回答 (5)

表2:教科「情報」に対するイメージ

パソコンやソフトの使い方を学ぶ (61)	コンピュータを使う (15)
	コンピュータそのもの (5)
	Microsoft Officeの使い方 (17)
	コンピュータの様々なスキル習得 (24)
「情報」について学ぶ (12)	
国からの押しつけ (3)	
楽しい (13)	
簡単 (2)	
つまらない (9)	
難しい (7)	
マイナスイメージ (16)	教員に問題あり (3)
	指導が手抜き (6)
	目的があいまい (2)
	よく分からない (5)
教科「情報」は不要 (9)	
将来や社会において役立つ (8)	
内容等が不安定な教科 (2)	
個人差が大きい (2)	
その他のイメージ (10)	

4. 考察

設問1と設問2の回答を比較したとき、これらの傾向が大きく異なる点に注目したい。設問1で頻出した概念は設問2でほとんど表出せず、教科「情報」のイメージはコンピュータの使い方を学ぶという側面が前面に押し出された形になっている。また、「楽しい／つまらない」「簡単／難しい」というように相反するイメージが挙げられている中で、マイナスイメージも多いことが判明した。教科「情報」を高校や教員が軽視していた状況もうかがえ、卒業生が教科「情報」を不要なものと考えていることにつながっているのではないかと推察される。

以上のことから、高校卒業生の多くは教科「情報」で「情報」について学んだのではないと感じており、教科名や本質と、その実態が乖離していることが示唆された。

5. まとめと今後の展望

本稿では、高等学校卒業生を対象とした質問紙調査の結果を分析することで、教科「情報」に対する意識を調査した。分析の結果、「情報」という語に対するイメージと教科「情報」に対するイメージが乖離していることが明らかになり、教科「情報」が情報教育の場としてじゅうぶんに機能していないことが示唆された。

今後はさらに調査・分析を実施し、イメージの乖離を生み出している原因を特定することが望まれる。さらに、教科「情報」が情報教育の場として有効活用されるためにどのような取組が必要であるか検討し、高等学校で情報教育が活発に取り組みされる体制を考察することが必要となる。

参考文献

- コンピュータ教育開発センター (2009)『「情報大航海時代」における制度的課題に関する 高等学校等における情報教育の実態調査 実施報告書』
- 清水康敬・山本朋弘・堀田龍也・小泉力一・吉井亜沙 (2007)「学校教育の情報化調査における回答者の違いによる分析」日本教育工学会論文誌 31(2): 249-257
- 文部科学省 (2009)『高等学校学習指導要領(平成21年3月)』
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/kou/kou.pdf (2009/7/19 確認)